

耕雲庵老師親交の碧雲居先生（二） 香木片々

河本 祖舟

1 齋藤兼輔氏の眼に映った大谷碧雲居先生

昭和29年の『曲水』誌に齋藤兼輔氏により12回にわたって掲載された「碧雲居先生」。

大正6年8月、中外商業新報社へ幼年工として入社したのは13才であった。その頃大谷さんの着ていた毛皮のチョッキの事である。何かの時、側へ寄って行ってそのチョッキにさわってみた。「何の毛皮ですか、兔？」と、云って爪でむしるように引っ張ると毛が抜けた。「こら、こら何をする。兔なもんか、らっこだよ。」といわれたが、13才の少年の目にはそれがとても立派に見えて、大谷さんは優秀な記者なんだなあと思秘かに思った。

先生を語ろうとしながら自分の事が多くなってしまいが、優れた一人の人格が一人の少年であった自分に過去37～8年間如何に影響していったか。母親が15の時亡くなった。活版部の少年工にとっては格別の好意であった。自分に香



此是碧雲居也
浩一路

典の包みを呉れる時「お父さんに孝行し給え。」と、アッサリ行って仕舞われた。義理の伯母が横浜で亡くなった時、大谷さんは

<悼 おもかげやたためば蚊帳も名残りにて 碧雲居>

と、短冊を手向けて下さった。

昭和14年、大谷さんが急性盲腸炎で東大付属病院に入院された時、奥さんに逢ったが、言葉のハッキリした何処か凄艶な感じをその時受けた。退院するというので挨拶代わりにする歌、「病院百首」碧雲居主人艸（印刷以代筆写）を印刷所へ取りに行った。自分も一冊貰った。その前と後の歌に

<午前二時ながながひびく屁の音を誰も聞かざり我一人聴く>

<病院生活は我に最初の経験なり今後若しあらばそれは死ぬ時>

昭和20年、大谷さんが亡くなられて曲水5月号帯封をつけたまま、その帯封に薄い鉛筆の字で、

<ゆくりなくよき日に会津若松の玄如人形 まゐらすなり>

の歌があった。

玄如人形とは木綿縞の素朴な縫いぐるみの人形で、会津に疎開した小沼静さんが、土地の民話に取材して創り出した、新名物のお土産人形を作ってもらって皆に配る積もりだった。大谷さんは玩具人形が好きで、疎開の時も衣類を整理し^{たんす}箆笥の引き出しに入れ、出廬される時も持って帰られた。

2 碧雲居先生の句集について

昭和7年刊の『碧雲居句集』は渡辺水巴先生の序に始まり、碧雲居先生の自序、凡例、それに養父である大谷是空氏の跋で結ばれています。

昭和37年、先生の十年忌を^{ほく}卜して、昭和7年以降の遺句を年次別にまとめ、それ以前の句集を併せ、改めて『大谷碧雲居句集』として上梓されました。それには先生の親友だった近藤浩一路氏による題字と

朴の花の表紙の装丁で、見返しには先生の小照、筍のスケッチ、短冊、序は中島月笠氏による「花謝し花開く」、佐野青陽人による跋、それに先生にもっとも身近であった齋藤兼輔氏の「あとがき」からなっています。

3 中島月笠氏の眼に映った碧雲居先生

月笠氏の「花謝し花開く」によりますと、大谷先生は、人間禅教団総裁耕雲庵立田英山老師と親交がありました。先生も若い頃、円覚寺居士林あたりで相当苦心した境地がわかる筈なのですが耕雲庵老師とは禅の方ではなく専ら俳句の方でお付き合いを始められました。先生自身は俳禅一致の境地で交遊せられておったものです。又、先生は「私には流儀はありませんが……」と云っておられましたが、お茶の方でも中々の達人であって、その耕雲庵老師が亦大茶人であるだけにお二人のお手前を拝見しておりますと、私共も素人ながらその三昧境に遊んでおられる様子に共に引き込まれる思いがしたものです。

月笠氏がある時、名栗川の温泉へ二人で旅行し、対坐吟で熱心に行っておりますと、突然先生は携帯用の雑囊から一冊の本を取り出して「月笠君、面白い一文があるから一寸聞き給え」と、声を上げて私に次の一節を読んで聞かせて呉れました。

「耳に聞くは声である。形と声は物の本体ではない。物の本体を証得しない者には形も声も無意義である。何物かを此の奥に捕えたる時、形も声も悉く新しい形と声になる。是が象徴である。象徴とは本来、空の不可思議を眼に見、耳に聴くための方便である。……」と。それは外ならぬ漱石の「虞美人草」の一節でした。私が長いお付き合いの中で、先生から直にこのような俳話めいたことを伺ったのは、これが始めであり終りでした。この時先生は次の一句を得られています。

秋の水人の寝ざめに石走る　　碧雲居

この句の「人」という言葉の意味の中には、歎きをもっている生あ

るものの在り方というものが滲んでいます。秋の水にその人の命のかなしみを奏でながら清らかに流れているのです。

先生のお酒ですが、酒徒、酒客、酒仙と書いてもびったりしません。先生の古い作に

<春の月およその時を戻りけり>

と言う句がありますが、強いていえば、その「およその酒痴」というのが良さそうです。

ある時、頑石夫人が京土産に爛徳利と猪口を贈ったことがあります。その徳利には「いろはに」と書いてあったので、早速「六十年ならひあげたるこの酒をいろはのいより飲みかへせとや」と例の狂歌に徳利と猪口を色紙にものして返されたことでした。

昭和9年、曲水木更津支社で、水巴先生の

<かたまって薄き光のすみれかな>

の句碑が鹿野山に建てられました。その際、在京幹部も一同参加しましたが、その前夜祭の余興に東京方一同総出で新作「流^{りゅうちよう} 鯿音頭」を踊ったことがあります。その歌詞がやはり碧雲居主人の作で、次のようなものでした。(1)(2)を省き(3)(4)を紹介しましょう。

(3) 17 西に室戸岬 ㊦ 東に鹿野山 ㊦㊦

海と山とに 海と山とに句碑二つ ㊦ ヤーナ ル ㊦㊦㊦

(4) 17 天の川瀬に ㊦㊦ ^{さかずき} 鯿 流す ㊦㊦

水の巴の 水の巴の曲水社 ㊦ ヤーナ ル ㊦㊦㊦

以上のように狂歌であれ常磐津であれ、絵であれ、往人として可ならざるはない軽るやかさなものであります。

4 佐野青陽人氏の眼に映った碧雲居先生

跋を書かれた青陽人氏の語る碧雲居先生ですが、先生から頂く手紙は巻紙に毛筆でした。それも一行に5字か6字、行間もそれにふさわしく取ってあるので、披見して伸びやかな息吹を感じたものです。

先生は何時の頃からか、岩波文庫「万葉集」の白文をポケットにして居られました。参考書に抛らず、直に読み取ろうと云うのです。そして一応の結論に達すると、短歌に造詣のあった宵衣君に^{あきらか}註しゆしておられました。

大谷先生は水巴先生のように^{るこつ}鏤骨彫心型ではありませんでした。先生は曲水一の長老でしたし、水巴先生は大谷先生に一目置いておられるようなところがありました。

又、こんな思い出もあります。月笠さんが

<鳥渡る大空や杖ふり歩く 碧雲居>

を取り上げて、如何にも大谷先生らしい飄々乎とした闊達さがあると云い、私もそれに同じでした。事実、先生にはこの句が象徴しているような^{かきん}瑕瑾かきんにこだわらない大きさがありました。

^{とり}酉年とりの人は何事にも器用だと聞いていましたが、先生の酉年もご多分に漏れず色々な面に特技を示しています。魚を料理すること、これは一寸素人には手が出ないのですが、先生は岡山から桜鯛が来ると、必ずご自身包丁を揮って、私や頑石君を^よ招んで一席設けられたものです。料理の品や、煮付けの具合、皆先生のお味加減で結構なものでした。先生は象牙に象眼のしてある長い箸入れを愛玩していました。それは小刀も入っている中国製のもので、その小刀を包丁代わりに器用に使い、そのような宴席をしつらえる時は、この時とばかりにそれを活用されたものです。

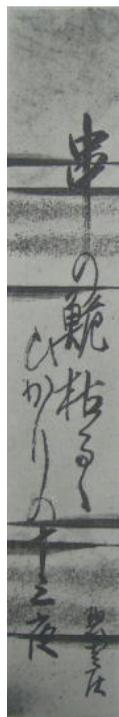
先生の余技として、^{てんこく}篆刻てんこくがあります。これは中外商業新報の編集局長時代、斯界の最長老石井雙石師について正式に年季の入ったもので「雨石」と号され、独自の域に達せられていたようです。篆刻のことを彫蟲と云いますが髭を蓄えた先生がうつむきになって長時間一心に小さな石に字を彫っている温顔を思い浮かべると、先生が本当の虫になっているように思えて吹き出したくなって来ます。

釣りはもとよりお好きなことであり、こちらから声を掛ければどん

な時でも否応はありませんでした。どちらかと云えば、海よりも河や湖沼を好まれたようでした。寒かろうと暑かろうと、一つ所に腰を据へて浮標を見つめておるのですが、前の週、釣り落としした片目の鮒であったり、釣り糸を切って逃げた鯰であったり、そうしたことを身振り手振り、おかしく話しては皆を笑わせるのでした。 (了)



秋風や城といふ名に石枯るる 碧雲居



串の鮒はよ枯るるひかりの十三夜

碧雲居

著者プロフィール



河本祖舟（本名／雄策）

大正11年、岡山県生まれ。昭和16年、両忘禅協会立田英山居士に入門。昭和25年、人間禅立田英山老師に再入門。現在、人間禅布教師。軒号／碧水軒。俳号／遊子。